



Title	＜紹介＞泉基博著『十訓抄の敬語表現についての研究』
Author(s)	米田, 達郎
Citation	語文. 1999, 73, p. 55-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68958
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

泉基博著『十訓抄の敬語表現についての研究』

米田 達郎

本書は、著者が長年、手がけてきた『十訓抄』の敬語研究に、一応の区切りをつけたもので、逐次発表してきた論文を中心にまとめ直し、一冊としたものである。著者は『十訓抄』の敬語表現を解明するための方法として、まず『十訓抄』編者の敬語意識に着目し、それを『十訓抄』の敬語表現とその出典の敬語表現との関係において考察する。次いで、「意味・用法が類似している敬語のせめぎあい」や人物関係に着目し、『十訓抄』の敬語体系を通時的・共時的に考察する。日本語の敬語研究は、従来さまざまな観点からの研究が進められ、大きな成果をあげているが、本書のように書き手の敬語意識に注目した立場からの研究はあまりなされておらず、貴重な研究であるといえる。

本書は、第一章「敬語意識について——『古事談』との対照について」(付論「十訓抄」に於ける「古事談の訓」——動詞を中心に)、第二章「尊敬表現について」(第一節「せ(させ) 給ふ・給ふる(らる)——地の文を中心に」/付論1「『平家物語』(地の文)の敬語——せ(させ) 給ふ・給ふる(らる)」/付論2「『宇治拾遺物語』の敬語——地の文の尊敬語」/第二節「せ(させ) 給ふ・給ふる(らる)——会話文を中心に」/付論「『平家物語』(会話文)の敬語——せ(させ) 給ふ・給ふる(らる)」/第三節「『言ウ』行為の動詞」/第四節「その他の問題」、第三章「謙讓表現について」(第一節「補助動詞「聞こゆ・奉る・申す・参らす」」/第二節「そ

他の問題」、第四章「丁寧表現について」(第一節「補助動詞「侍り・候ふ」」/第二節「その他の問題」、以上四章で構成される。中でも、著者の方法が明確に表れているのは第一章と第二章であろう。第一章では、『古事談』の説話を『十訓抄』に取り入れる際になされた敬語表現の改変に着目する。特に補助動詞「侍り・候ふ」の二語を取り上げ、両語の使用状況について、使用される人物関係を中心に考察を加える。その結果、これらの語の敬意度が敬語史の流れと矛盾することを指摘し、この状況を『十訓抄』編者独自の敬語意識によるものとする。第二章では、考察対象を尊敬語に限定し、「意味・用法が類似している敬語のせめぎあい」や人物関係に留意しながら、『十訓抄』の尊敬語の敬意度が「せ(させ) 給ふ・給ふる(らる)」の順に高いことを指摘する。その状況を「平家物語」などにおける尊敬語の使用状況とも比較し、敬語史の流れに沿っていることの確認も怠らない。また、『十訓抄』に登場する皇族に対して使用される尊敬語を、奈良時代の皇族と平安時代の皇族とに二分して、両者を比較した場合は、後者の方が一段高い尊敬語が使われていることを指摘する。著者はこのことについて、人間の理想像を平安時代に強く求めようとする『十訓抄』編者の敬語意識が働いた結果であると論じる。

著者は、今後の課題として、本書で取り上げなかった敬語語彙の考察や、日本文化史との関連で『十訓抄』の敬語表現を考察することなども視野に入れており、今後の発展が期待されたが、昨年(一九九八年)一月一日、急逝された。五五歳。ご冥福をお祈りする。(一九九八年七月二〇日発行、笠間書院刊、二九一頁、本体価格七五〇〇円)

—— 本学大学院博士後期課程 ——